日本指圧専門学校同窓会

会報

創刊号

発行年月日　昭和57年3月31日
発　行　者　山内貞四郎
編集責任者　小林　秋朝
日本指圧専門学校同窓会
東京都文京区小石川2-15-6
〒112 TEL 03－813－7354
題字　山内貞四郎

ご挨拶

同窓会会長
山内貞四郎

会員のみなさまには、ご壮健にて臨床活動や指圧道の究明に、寧日なくご精励遊ばされてお出のことと、心からお慶び申上げております。

さて私は、去る四月の同窓会総会において、図らずも名誉ある日本指圧専門学校の同窓会長に選出され、不肖を顧みずお引受けして、ただ今今後の同窓会運営についていろいろ思索中でございます。幸い総会において選出された役員の方々や、その後においてお願いした幹事の方々、運営委員の方々は、会の仕事に対し意欲的に熱心に取り組んでくださっておりますので、前途に大きな光明を見出し、内心ホットしている次第でございます。

現在やっている会の仕事について二、三触れてみますと、総会において決議のあった同窓会名簿の作製配布、五十六年度予算編成とその承認などの重要案件は、着々進行中でございます。その他にも同窓会として重要視される会員相互のコミニケーションの場としての会報の発行や、会の運営がより一層スムーズに行くような会則整備の問題などがあります。これらの案件を逐次完了して、同窓会としての機能を充分に発揮させるようにすることが、会員みなさまの意志でもあろうと思いまして、現在これらの仕事に励んでいる次第でございます。これらの仕事をでき得る限りまとめあげて、会員の所在や消息などが明らかになり、横と縦との連絡が徐々にでも密になれば、しぜん「同じ翼の鳥は集まる」の例の通り、やがて会の目標ともいうべき親睦の気運が今まで以上に醸成され、活発な同窓会運営がやがて期待できることを信じるものであります。

なお日本指圧学院、日本指圧学校、日本指圧専門学校等の卒業生の方々は、如何に遠方に所在するにせよ、また好むと好まざるとに拘らず日本指圧専門学校同窓会員であります。終生手をたずさえて進む同志でもあります。したがって同窓会は他人の集りの会ではなくて、自分たちの会なのです。このような気持ちをぜひお持ちいただきたいものです。いろいろな会に出席してよく聞くことばに「今日は集りが悪いなあ」とか「今日はよく集ったよ」などということばはいつも聞かされます。つまりどんな会でも「集り」ということに、最大の関心が払われていることを端的に物語っているわけです。即ちどんな会合でも「集り」が悪ければ、会の発展は期待できないからであります。われわれの会も全くこれと同様で、何はともあれ、集まるということが会を守り立てる原動力になるのです。ある遠方の方から病気のため同窓会を退会したいという便りがありました。恐らくこの方は同窓会があっても行かれないという責任を感じてのことだろうと思いますが、やむをえない事情は人それぞれに存在するものですし、同窓会は入会制度によって組織される会でもありませんので、すこしも退会する必要はないのです。

五十七年度の総会は、五月八日に開かれる予定でございますが、総会にはぜひご出席ください。大ぜいお集りいただけば組織の充実と共に親睦の輪も広がり、臨床天狗話に花が咲くというものです。こうした会合が年々続けば、親睦の雰意気も年々密になり、このような雰意気から会員の資質向上につながる素晴しいヒントが生れたり、あるいはもう一つの同窓会の目標たる母校の発展に寄与する活動や企画が生れてくるものと確信するものであります。

新校舎増築（2F）3月20日竣工

三位一体

日本指圧専門学校校長　浪越徳治郎

三位一体（さんみいったい）という言葉がある。相撲の「大関」「横綱」の資格を備えるには、心・技・体、この三つの条件が最高でこれ等が「三位一体」とならねばならぬ。

天・地・人―。真・善・美―。いづれも、「三位一体」の姿である。

今回、日本指圧専門学校同窓会が、強固な陣容で結束を固め、会報発行の運びとなったことは喜びに堪えない。

「指圧を天下に広めよう――」の大望を抱いて北海道から上京したのが、昭和八年三月だった。孤軍奮闘！そしてつくづく感じたことは、一人の力には限界がある。どうしても同志を作らねばならぬということだった。

昭和十五年二月十一日、昔の紀元節の佳日を選んで待望の日本指圧学院を創設し、戦争中も同志の養成に打ち込んだのである。

昭和三十二年三月、厚生大臣の認定校となってからも、既に二十五年を経過した。卒業生は日本全国から、世界各地で指圧の苗を植えつけている。

昭和五十四年六月、東京において第一回指圧国際大会が開催され、今年は、ヨーロッパで第二回指圧国際大会が開催された。指圧の同志は、正に天下に広がって行く―。

日本指圧学院として出発したのが、学校となり、今年からは日本指圧専門学校に昇格した。その卒業生が団結して同窓会を結成――。母校の発展と同志の親睦を図ることは、誠に意義深いことで感謝感激である。

そこでもう一つ、同志の皆さんに訴えたいことは、「日本指圧協会」の存在を理解してご協力をお願いしたいことである。

「日本指圧協会」は、指圧師の団体として昭和二十一年十一月三日結成され、指圧師の素質向上のための講習会、夏季大学等を開催したり、法的地位獲得のため、国会や関係官庁との交渉等を行う、指圧師のための重要な役割を持った団体である。

学校・同窓会・協会――。これ等はみんな不離一体のものである。これ等が三位一体となってこそ、指圧師の共同の目的が達成され、指圧の真価が発揮されるのである。

高い理念と、広い視野に立って「三位一体」となるよう、みんなで努力しよう。

日本指圧専門学校同窓会新役員紹介

名誉会長	浪越徳治郎
名誉顧問	川上春治　一期
相談役	井沢　正　学院
会長	浪越　徹　学院
副会長	山内貞四郎　一〇期
	吉田克廣　一期
	石垣惟一　六期
	藤井正弘　八期
	小出忠志　一〇期
	片岡弘昌　二一期
幹事長	相澤金雄　一五期
副幹事長	岡本　優　七期
会計	青木　宏　一九期
	浜中喜美子　一八期
書記	藤井正弘　八期
	木下　誠　一八期
幹事（名簿作製委員長）	上野欣二　一七期
〃（会報編集委員長）	小林秋朝　一七期
〃（会則諮問委員長）	山田明信　二三期
監査	幸村善雄　一〇期
	山口忠治　一八期

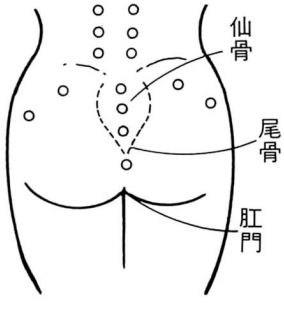
海外通信

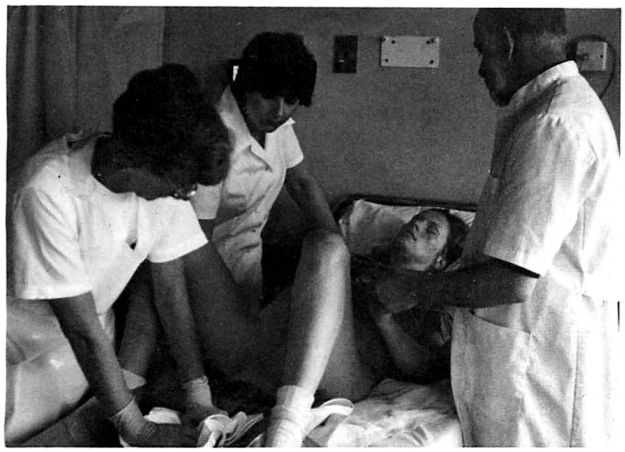
オランダのビンクス氏指圧による無痛分娩に成功

日本指圧専門学校副校長　浪越　徹

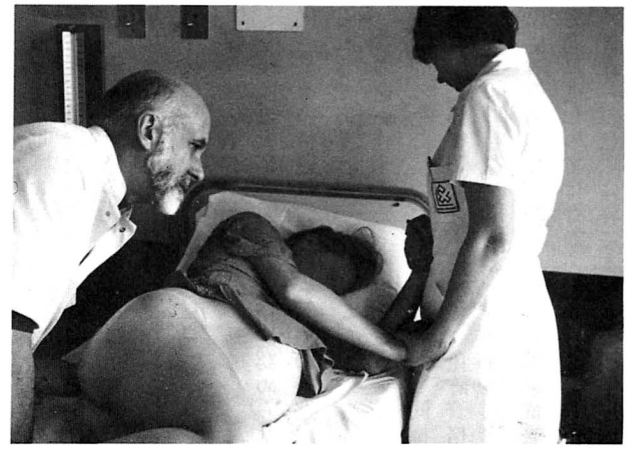
デニス・ビンクス氏は英国人で楽団の演奏家として昭和45年に来日し、その後指圧に興味を持ち、指圧教室で習っている内にだんだん指圧の魅力に惹かれプロとしての道に入る決心をして、日本指圧専門学校に聴講生として2年間、一生懸命に本科で指圧実技を習得した。その後オランダ人の夫人と共にオランダに行き指圧を開業した。指圧の良さが知れわたる内に、だんだんと指圧の技術を学びたい人が増え始めてきて、彼は学校を開設することにしたが、この種の学校はオランダでも始めてのケースなので、認可をとるのは容易ではなかった。そこで彼の要請もあり、日本指圧専門学校のオランダ分校として学校側から許可をする証明書を出したところ、オランダ当局からスムーズに認可を得られたのである。入学する生徒は主として、医学的知識のある理療士や美容師を対象として現在に至っている。彼の治療所に来る患者はほとんど病院からの紹介によるもので、症状としては不眠症、五十肩、膝関節の疾患、神経痛、リウマチ、整形外科からの外傷性の後療法に、などである。最近の彼からの通信をここに紹介しよう。それは、これといった原因がなくなかなか子宝に恵まれない主婦を指圧し、約6週間後に受胎可能にならしめたの

無痛分娩の主な指圧部位





手指の指圧（分娩室にて－娩出時指圧中の写真は割愛した－編集室）



仙骨部の指圧

である。その後も安産を目指して軽い指圧を腰部、仙骨部を主体に施術し順調に進み出産の予定日には医師の許可を得て分娩室に入室し、産婦人科医の協力と共に、彼は指圧による無痛分娩をこころみたのである。陣痛が始まり、腰部から仙骨部の指圧で痛みを和らげ、上肢の指圧点を呼吸に合わせて行なったところ、陣痛から35分で無痛分娩で無事、女児の出産に成功したものである。生れた子の名前をつけてくれとたのまれたビンクス氏は、この子は浪越指圧のおかげで出産したのだからとNAMIKOSHIの中からとって〝MIKO〟と名付けた。この指圧の無痛分娩の効果に立ち合った産婦人科の医師達も指圧に多大の関心を持ったのである。ビンクス氏は今後、指圧による無痛分娩は100パーセントの成功を期待できると自信と誇りを持って云っている。我々も大いにこの方面の研究も進めて行きたいと思っている。

指圧が世界を結ぶ

発刊によせて
指圧協会にご協力を

日本指圧協会理事長
吉田克廣

永い歴史と輝かしい伝統を誇る母校日本指圧学校が日本指圧専門学校に昇格されましたことを衷心よりお喜び申上げます。

さて、日本指圧学校同窓会の目的とは(1)学校の栄誉発展に寄与する(2)会員相互の親睦であり、日本指圧協会とは、一身同体の関係をなす。何故ならば日本指圧協会会員は殆どが日本指圧学校卒業者である。又協会の会長は日本指圧専門学校長であられる浪越徳治郎先生である。卒業生は二ヶ年の螢雪の功なり、資格試験の難関を突破免許証を獲得し、指圧師の公認団体である日本指圧協会に加盟するのが常道とされており、協会発展の基礎をなしておるのが現実で、同志先輩と共々指圧道発展の為一致団結邁進致しおる現況である。このような状況下に於ての同窓会事業運営は殆ど協会運営に同調、円満な運営が為されて来た。現在協会の最大事業は指圧師法制定請願運動と社団法人取得並びに指圧理論の科学的追究であり、指圧師の業権確立と指圧師の地位向上発展を念願としておる。このことは協会員一同が物心両面に於て協力し、その目的達成に邁進しておるのである。他のあんまマッサージの業界でも業権の確立地位向上発展に活発な運動が続けられておることは当然である。現在吾々の協会が活発な運動を続けておる「指圧師法制定」「社団法人取得」「後輩の指導育成」等については特にご理解を願いたいものである。この道一筋（真実一路）指圧道発展の為に偉大な業蹟を挙げられたのが浪越会長であり、世界全人類の健康福祉に貢献されるとの名声を博されましたのもこの指圧道である。業権確立、地位向上発展の為にも一層指圧理論の科学的追究などにより、医療部門の地位を獲得しなければならないものと信じる。何かの都合で協会を脱会された方々もこの遠大な構想をご理解の上協会会員としてご協力下さる様切にお願いいたしたいと思います。

専門学校（専修学校）について

日本指圧専門学校
副校長
石垣惟一

本校は昭和五十六年四月一日を以て専修学校の認可を得て、日本指圧専門学校として発足した。以下専修学校の概要について記す。

学校教育法の一部改正（昭和五十一年一月二十三日）があり、同法第一条の学校（大学、高専、高校、中学、小学校等）以外に法第八十二条の二により、次の通りである。

一、目的

第一条に掲げる以外の教育施設で、職業若しくは実際生活に必要な能力を育成し、又は教育の向上を図ることを目的として次の各号に該当する組織的な教育を行うものを専修学校と称する。

二、課程

専修学校には、(1)高等課程、(2)専門課程又は一般課程を置く。

(1)　高等課程　後期中等教育段階の青少年を対象とし、

(2)　専門課程　高等教育段階の者を対象とする。

一般課程、高等課程、専門課程以外の者に㊐の教育を行うものとする。

三、名称

(1) 高等課程を置く専修学校＝高等専修学校

(2) 専門課程を置く専修学校＝専門学校と称することができる。

四、その他（分野　修業年限等）＝専修学校設置基準による。

さて、本校の場合は、

一、名称　日本指圧専門学校

二、課程　専門課程（五十七年入学者より高等学校卒業以上の者。（旧中学卒を含む）

三、分野　医療関係

四、修業年限　二年

五、目的、内容　「指圧師の養成」

以上の様に専修学校となったが、これはあくまで文部省管轄による学校教育法に於ける位置づけであり、厚生大臣認定による「あん摩マーサージ指圧師」の養成施設であることには違いない。従って、「あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師等に関する法律」並びに同法に係る「学校、養成施設認定規則」によるものであり、その教育内容、単位数等について特別の変化はない。但し、専修学校設置基準に示された事柄については遵守しなければならない。

今後の見通しについて（私見）

卒業生の資格、待遇など。

今後は短大卒と同等の資格が認められ、従ってその待遇についても同様の待遇が得られるであろう。

なお遠い将来であるかも知れないが、指圧師等の免許については、医師等と同様に教育は文部省関係（学校）で、免許資格については厚生省の担当となり、資格試験も厚生省直轄実施、即ちいわゆる国家試験の方向に進むのではなかろうか。

これらの意味に於て本校が専門学校（専修学校）になったことは、更に短大（大学）へ進む足がかりともなり、意義深いものがあると考える。

今後益々の隆盛と発展を願う者である。

視点　会員名簿の作成を終って

日本指圧専門学校
講師　十七期
上野欣二

五六年度版日本指圧専門学校同窓会会員名簿の発刊は五二年度版以来のことで、計上予算二一〇万円（年度総支出予算額の約四八％に相当）の大事業であった。かかる高比率の予算が計上された理由は、会組織、会員間の通信網の確立が今後の同窓会組織活動充実のため避けられない基礎固めの仕事だったからである。

名簿作製の仕事は昨年七月から始められたのであるが、この時点から新同窓会の組織活動は始ったといってよい。できるだけ多数の会員に調査票を直送して正確な回答を集めることが眼目であった。多くの会員に名簿作成に関与してもらえるうえ、新同窓会の胎動を一日も早く、事業を通して知ってもらうことが出来るからであった。調査回答も郵便受信料受取人払の私製往復ハガキを使った。こうすれば家族の方々を含めて、誰の目にもつき易く、回答投函の忘れも防げるし、名簿作製への関心が高まるうえ、経費的にも返信のあった件数だけ受信料を払えばよいわけで、その分だけ調査票を多く発送することにした。

調査票発送の宛先きチェックは、引き継いだ同窓会名簿を基礎に、「指の光」住所変更欄を五一年度分から期別に拾い上げて訂正補追し、一方、返信ハガキに「あなたの知っている知人住所欄」を設けて会員の方々からも正しい宛先チェックの協力を仰ぐことにした。

夏休み明けの九月七日には宛名書きも終わり調査ハガキ三八〇〇通を一斉発送した。回答受領は九月十日の六四通から始まったが、通信欄には激励、慰労、名簿作成上の要望や注意事項、はては協力申し出の言葉などが毎日寄せられ、同窓会の組織活動を期待する会員側の声援を身近かに感じたが、一方、交通事故や病床生活にある旨の通信もあり、これら悲運の会員の方々に、身近な同期生から電話の一つ手書の一本でも差し上げられたらいかほどの慰めと励ましになることかと焦躁の思いにかられることもしばしばあった。

名簿の作製にタッチして名簿の効用と組織との関係を今さらのように考えさせられた。①同窓会活動が充実すれば名簿もさらにその正しさと広さを増す②一度通信網が切れるとその人は組織から置き去りになってしまう③名簿はあらゆる角度から使い易くする必要がある。などのことである。

㈠名簿を使い易くするには氏名別総索引があるとよい。しかしこれは会員数、計費、労力の各面からいってもむずかしい。そこで今回は本文の氏名掲載順序を卒業期別・個別（第七期から）五十音順に再編しなおし、さらに住所地区別、卒業期別・氏名欄を作り、少くとも住所がわかれば卒業期がわかるように索引的な考え方を採り入れることにした。㈡逝去者、不詳者（住所不明者）は同窓会活動から置きさられてしまう。不詳者がこれ以上ふえないように、不詳者が今後の会活動のなかで復活されることを願って、空欄の多い頁が出るとしても、逝去者、不詳者を別項扱いに掲載するのは避けることにした。

また今後の問題点として、今回のような大規模な名簿作製は経費的・労力的にも大変であるから、今後は正式名簿の補助版として一年ごとに住所氏名変更者・新規入会者を集録し「名簿訂正補追版」のようなものを年次発行するのも一案として思考中である。

次に、出来上がる名簿の概要を紹介すると次表の通りとなる（57・1・10現在）

（注一）効用度は学院～二三期を対象に考え、信ぴょう度を勘案してABCDの四ランクと「不詳者」に分類。〔Aランク〕＝調査票回答者と期代表が住者確認した

56年度日本指圧専門学校同窓会会員名簿　概要一覧

	Aランク 本人、代表より	Bランク 知人・通信実績	Cランク 着信予想	Dランク 海外	Dランク 逝去	不詳	合計
学院～1期～23期	2354名	528名	608名	25名	140名	498名	4153名
24期	293名						293名
小計	(2647名)						(4446名)
25期	301名						301名
合計	2948名						4747名

学院～23期の名簿効用度（24期は新会員、25期は準会員）

基数　4153名－（25名＋140名）＝3988名

〔Aランク〕　2354名÷3988名×100＝59.0

〔A＋Bランク〕　2882名÷3988名×100＝72.3

〔A＋B＋Cランク〕　3490名÷3988名×100＝87.5

〔不詳者〕　498名÷3988名×100＝12.5

者で、最も信頼度あり〔Bランク〕＝知人紹介欄、「指の光」等を発送している者、通信の実績上信ぴょう性あり〔Cランク〕＝発信ハガキが戻ってこなかった者で発信到着予想者〔Dランク〕＝海外在住、逝去者〔不詳者〕既に住所不明だった者及び発信ハガキが差し戻しになって来た者。

五十六年度版名簿は多数会員の関与と協力で刊行されたが、事務応援、印刷、郵便受領等で母校教務・事務局の先生方にも深い理解と協力をいただいた。さらに感謝にたえないのは多忙をかえりみず最終名簿一覧の検討再調査を心よくお引受け下さった各期別新運営委員の方々のお骨折りである。これにより三八二名に及び会員住所が確認訂正されたことも特記しておかねばならない。今後はこの名簿をタタキ台としてさらに充実した名簿ができるように期待してやまない次第である。

YOKOGA

昔の一コマ

東邦大学医学部病理学教室
日本指圧専門学校
病理学講師
田村鉀二

待望の会報初刊、お目出とうございます。はやいもので、私が本校に奉職して、もう十四年目になりました。先輩の脅迫と甘言にのせられて、はじめて学校へつれて来られたときはおどろきました。寒い冬の夜でした。校舎がありません。現在の校舎のあるところは建築現場です。敷地内には木造二階建の旧学生寮が一つ、ぽつんと建っているだけです。土曜日の夜で、一時限目が校長先生、二時限目が私の授業でした。教室は印刷学校に間借りしているとのことで、伝通院を左に曲り、右に折れて坂道をだらだらと下り、しばらく歩いて左側に少し下ったところです。ここだよと云われて入ったところが又おどろきでした。二階が教室といわれて階段を昇ります。この階段が時代もので、すりへった段をふむとギシギシと相当に派手な音が寒い夜にひびきます。手すりに近い端を音のしないように昇ります。二階に上って立てつけの悪い板戸を、そっと開けると、畳敷きの部屋に二十数人の年輩の（と当時の私には見えたのです）学生諸兄が寺小屋式に机を前に座っています。小さな立黒板が一つと、そのとなりにダルマ・ストーブがショボショボと暖かい焔をあげてもえています。はじめましてと挨拶して本校での私の初講義をはじめました。

さて授業ですが、この古狸諸氏（と当時の私には見えたのです）を相手にどうなることやらと案じていたら、さすが年の功、「先生、寒かったら、もっと石炭入れていいんだよ」と云って下さったのが、忘れもしません松戸の野沢さんです。小さな体に大きなカバン、昼は小平市の勤務、夜は指圧学校、終って帰ればずい分夜おそくなるでしょう、けど殆んど休まずによく出席しておられました。この言葉がきっかけで、何とか授業をやり遂げましたが、今思い出しても冷汗が流れるような授業だったと記憶しています。ほんとうに九十分の授業が終ると、石炭ストーブのためか、初授業の緊張か、厳冬のすきま風の教室で汗をかいていました。

終って又伝通院のゆるい坂道を上って校長先生のいらっしゃる仮小屋にもどります。校長先生が待っていて下さって、寒かったでしょう、暖まりなさいとストーブに石炭だったかマキだったかを入れて下さる、と同時に茶わん酒（この母心は今も脈々と連なっています）。充分暖まって気持よくなったところで、今夜はご苦労様、と薄謝を頂載して、おやすみなさい、気をつけて。なにかとても家庭的な、本当に人と人とのふれ合いの場という感じの学校でした。

年移り人は変り、現在の立派な校舎と多数の学生諸氏を擁する専門学校をみるにつけ、今昔の感があります。考えてみると約十四年間、本校で授業を続けられたのも、やはりこの学校が大好きだからなんだと思います。

日進月歩する学問に追いつけ追いこせと、ひたすら前を見つめることも大切でしょうが、たまには昔をふり返ってみるのもよいでしょう。「初心忘るべからず」これを機会に、もう一度あのダルマ・ストーブを思い出しながら、気持を新たに今後の授業に専念する所存です。よろしく御指導下さい。

感謝をこめて

埼玉飯能病院長
渡辺治基

私が、日本指圧学校の皆様とおつき合いをお願いしてから、一年になります。しかも、埼玉飯能病院は、昭和五十二年開設以来、色々と、お世話を頂いております。

埼玉飯能病院は、老人性骨粗鬆症、脳卒中後遺症、老人性関節疾患など老人性諸疾患の治療、介護を目的とした医療を担当しており、これ等の疾病に罹患したお年寄りが、『自分のことは、自分で出来る』までに、回復できるよう、リハビリテーション、機能訓練を主体として、医師を中心とした医療チームが、ある時はやさしく、又ある時はきびしく、お年寄りを治療、指導しております。

『指圧の心、母心』と、浪越先生が主唱される指圧の心は、とりも直さず、お年寄りを治療する私どもの医療の方針そのものであり、大変、尊いお言葉と感銘致しております。

毎月、日本指圧専門学校の二年生の皆様が、実習にご来院される日々を、全患者が

埼玉飯能病院で講義中の渡辺治基先生

鶴首し、指折り数えて、待ち望み、その指圧研修が、私どもの医療に、どれ程貢献しておりましょうか。本当に筆舌に盡し得ぬ程と、高く評価し、心から感謝申し上げております。

私は整形外科を志した医師でありますが、指圧、超短波、温浴治療、機能訓練を共に織り混ぜたリハビリテーションにより、埼玉飯能病院の治療効果が、期待以上に上がり、朝な、夕なにお年寄りの笑顔と、喜びの声が、リハビリ室から見られるのは、本当に有難いことと心から喜んでおります。

近時、薬漬け医療、検査漬け医療が指摘され、『医は仁術』を忘れた悪の医療が、世間をさわがせております。患者の苦しみ、痛みを取り除くために、心のない医療は決して患者に与えてはならないのであります。

私は、日本指圧専門学校の皆様から、『指圧の心、母心』が万病を癒やす妙薬である…との教訓を感謝をこめて得たのであります。

臨床実習（病院、老人ホーム）について

副校長　石垣惟一

一、病院実習のはじめ

昭和52年6月に飯能市に「埼玉飯能病院」（老人専門）が設立され、7月より本校16期国田イト子さんがリハビリテーション部門に勤務された。その後病院側と交渉の結果、当時の内木院長先生並びに、現在の渡辺院長先生方の英断によって、本校学生の臨床実習が場を与えられ、53年6月より実習を開始して現在に至っている。

二、実施状況

53年度	6～11月	5回	
54年度	4～3月	9回	211名参加
55年度	4～3月	11回	195名参加
56年度	4～1月	10回	200名参加

右　国田先生

55年度より夏季宿泊研修を行い、実際に施術した患者の数は延1000人を越えている。

三、病院の実態

設立後日も浅いので建物は勿論、明るい病院であり現在入院患者約120名、内リハ室にて電気、温熱療法、指圧療法の患者40名病棟だけで指圧を実施する患者数は約40名である。入院患者の8～9割を二人の指圧師で担当している現状である。

主な患者の障害は、脳血管の疾患に伴う後遺症、その他骨粗鬆症など老人病であるがスモン、リウマチ、薬疹患者も入院している。

四、実施例

1　カルテ、氏名、年令、病歴等と医師の指示による　施術部位を、裏面には実施年月日。実施状況　感想等記入している。

2　患者の例1

S女性、79才、入院52・7・15

病名　脳硬塞（左片まひ）、糖尿病、脊椎変形症、骨粗鬆症

施術したN女性の感想

最初は全身を軽く操作して具合をみた。左上肢、下肢を入念に、後右も同様に施術する。

最後に肩甲間部から腰部、下肢に頸部はとても喜ばれた。全神経を集中して行ったが喜こんでもらえたのでホットした。

班別に記念写真

例2

N男性　83才

病名　脳動脈硬化症、冠不全、両膝変形性関節炎、陳旧性肺結核、難聴あり。

施術者O女性感想

とても元気な患者さんで、リラックスして出来た。雑談しながら楽しい40分でした。

3　患者の声

①体が軽くなった。

②気持がよい、具合がよく調子がよい。

③皆さんの来院をまっている。

なお医師の指示によるので毎回施術出来るとは限らないが、53・6月開始以来一回の休みもなく続けて施術している患者もあり、受ける側のベテランとなり、施術について評価する方もいる様である。

五、その他

患者さんのみでなく看護婦、補助看、事務、炊事関係の方々にも時折り施術してよろこばれている。

紙面の都合で細部にわたることが出来ないが病院で、理解ある院長の元で、指圧治療が出来ることはうれしいことである。

なお老人ホームも月1回実施しているが今回は割愛する。

夏季宿泊臨床実習

二十四期　高野昇司

第二十四期生の昭和五十六年度夏季宿泊臨床実習が、八月二十四日(月)・二十五日(火)の二日間おこなわれた。午前十時十分池袋駅西武線一階改札口に集合、同十時二十三分発の急行飯能行にA一一、B一二、C七、D六の各組合計三十六人（うち女子十二人）が徹先生や石垣先生実技の先生方に引率され乗車、約一時間後に飯能着、駅頭にて昼食持参者はただちに埼玉飯能病院へ、その

他は食事をとるため、ひととき町中へ、以後病院で先発組と合流、職員の皆さんに施術した。午後一時四十分より徹先生の講義から始まり、病院専従の国田先生（第十六期）、ついで渡辺院長の講義を受講、渡辺院長は当初、話しべたですがと切り出されたが、浪越校長の母心の話しからはじまり、ご自分の経験談や高令化社会へ向っての老人医療の問題にまで話しを発展され、最後には長生きのためにはHDLコレステロールが重要である事にまでふれられ、運動の大切さと、お酒も清酒で平均二合位は良いという話しには思わずニンマリする人もおり、みんな真剣にメモを取っていた。午後三時より約一時間、患者さん相手の実習をおこなう。病院を出てから、約二十分間バスにゆられ、さらに徒歩十分位で民宿「山鳩荘」に到着。午後六時より、来賓に病院の事務長、飯能在住の持木先生（第一期）、国田先生、曽我先生（第二十二期）らを迎えて、懇親の夕食会を開催、徹先生のご挨拶で開会、山奥のタヌキもびっくりするほど賑やかに、かくし芸大会などで夜の更けるのも忘れ楽しんだ。翌朝は午前七時起床、山の上だけに早くも秋冷を思わせる朝だった。朝食後、記念写真を撮り、九時出発、飯能名所の一つである天覧山へハイキング、名栗河原で持参のおにぎりを食べ、老人ホーム班と病院班の二班にわかれて、午後より再び実習をおこなった。臨床実習の実を充分に挙げ、さらに各クラスの懇親の楽しさと思い出を残して、それぞれ現地にて解散、帰路についた。

◉同窓会総会案内は十一頁です。

体育祭に参加して

二十四期
岡本草苑子

私達が全校あげて参加する、恒例の体育祭が、去る昭和五十六年九月二十三日、秋分の佳き日に盛大に開催されました。

本年は特に、昭和十五年二月十一日創立以来、永年親しんできた「日本指圧学校」という校名が、その名も新に「日本指圧専門学校」と改称された、意義深い年です。そのためか当日の雲ひとつない紺碧の秋空や、さわやかな大気も、ものみなあげて私達の「日本指圧専門学校」の輝かしい前途を祝してくれるように思え、感激で胸が一杯でした。

参加種目は昨年同様、女子五〇メートル競走、タイヤころがし、男子百メートル競走、騎馬戦、あめ喰い競走、三人四脚カードあわせ、ケツ圧測定、百足競走、紅白玉入れ、クラス対抗リレーなどのほか、教職員、来賓や家族参加の競技など、いつもながら盛況をきわめました。指圧音頭を踊りながら、指圧療法の特徴や効果を、歌詞の中によくも巧みに詠みこんであると、いまさらの如く感じいったり、フォークダンスでは、過ぎし日の学校時代を思い出したりしました。

さて、振り返って我が二年C組の成績ですが、仮装行列の準備にエネルギーを使いはたしたせいか、本番ではいまひとつ盛り上らず全校八クラス中、第六位と、あまり良い結果でなかったのが悔まれます。ともあれ、参加することに意義があったということでしょうか。

昨年以来、二回の体育祭を通じて感じた最大のことは、雰囲気がとてもよいことでした。おそらくこれは校長の浪越徳治郎先生の、大きな柔い手、そのぬくもりが原点となっているのではないでしょうか。このような学校行事の良き伝統が後輩の方々に受け継がれていくことを期待しています。

青空指圧の一日

二十四期
千野京子

五月三日、待ちに待った今朝は、煙るような霧雨。本当カナ、早じまいなら残念と言いながら、傘と弁当を持って駅まで走る。（白いトレパンが宙を飛ぶ）、上野駅に着くといつか空は晴れて、押すな押すなとプラットホームは、家族連れで超満員。やっとの思いで会場へ。いる、いる白い人々の群が蠢めいている所が目ざす青空指圧教室の会場、青い幟がはためく。ハンドマイクの満都子先生が椅子を並べ替えたり、宣伝にこれつとめ、隣り合せに太いむき出しの大腿部を衆目にさらして、女子高生らしい鼓笛隊の一団のきらびやかな賑やかさ。（教室とは無関係でした）始めは級友の伊藤氏、二人目は学生らしい青年（少々くすぐったがり屋、背部を掌圧してから入った）と、三人目はクリーニング店の妻女。七人八人と快調。気がつくと孫の帽子を頭に乗せて、木蔭の椅子に荷物を抱え横坐わりに体をひねって憩う老女。ご希望？と訊うと、当然ですよとの返事。大勢待機の施術者もいるのに、難儀な人！と思ってしまう。秋田弁ではこういう姑を「ユルクナイ、バッパ」（きつい婆）という。この人の肩甲間部の固いこと、シャツの下はベニヤ板の如く、ニッチもサッチもいかない感じ。「アレーッ、誰か助けて、神様、仏様、ゴットー、ああ馬鹿力様ヘルプミー」心の中で叫びながらあたりを見まわしても、誰もみな夢中の有様。胸中のわめきを押え、無い知恵を絞る。肩甲骨の内側縁に小指球を当て、肩峰は掌圧での対立圧。少しゆるむ。誰か寄って来る、実技の先生かナ、基本操作以外で叱られるかなあ。しかし数十秒で去った。ヤレヤレ。ベニヤ板は未だ人体とは言えず、遂に奥の手登場。肩甲間部を中心にバイブレーション、流動圧法。あ、遂に母指が沈むではないか。バンザイ、効果あり。ベニヤ板がいくらか人体になった。オワリマシタ。返事は「アラ、ソ」それでもノコ、ノコ、アンケートへ。さて何と書かれたことやら。次からベニヤ板様は全部この手を使う。一〇人中八～九人までは施術前と態度が変わる。椅子から立ち上ると私の目を正視してからお礼を言ってくれる。反省いろいろ、兎も角、この日は多くの得難いものを私の鞄に入れてくれた。学校には大感謝。まことによい催でした。でも疲れましたネ！

同好会発足のお知らせ

学芸や、趣味、特技をお持ちの方同好会を創っては如何！相談・世話役、編集室へ

医学四方山話

――アキレス腱――

母のおっぱいを吸わなかったアキレウス

アキレウス（Achilleus 英語ふうにはアキレスAchilles）はトロイア戦争の立役者として知られており、アキレスのかかとの名で医学の上にも名をのこした。足首の後でかかとの骨の上のところに触れ、歩いたり走ったりするときに働く腱である。

彼の父はペレウスという人間であったが、母は神属の一員であるテティスで、生まれた子をただの子にそだてるのを好まなかった。神の血が通っているのだからなんとかして不死身にしたいと思うのも無理からぬことである。そこで、生まれた子を毎夜火の中に入れ、傷口は神の主食といわれるアムブロシアの軟膏で手当てしていた。焼けるだけ焼いておいて、焼けないところだけをのこして不死のからだをつくる目的である。アムブロシア（ambrosia）のa＝am―は否定を意味し、brotは死すべき意味であるから、不死ということになる。

あるとき、夫のペレウスがそれを見ておどろき、あわてて妻の手から子供をとりあげたために、彼女のにぎっていたかかとのところだけが試練の火をくぐらず、ここが彼の盲点となったといわれる。一説では、彼は七番目の子で、母神は六人の子を不死身にするために火の中に入れたが、みな焼け死にし、最後にアキレウスをためしたともいう。あるいは、母神がこの子を地獄の川ステュクスの水にひたして不死身にしたといい、このとき彼女は両方のかかとをにぎっていたので、同じようにここだけが可死（死すべき場所）となったといういい伝えもある。

夫のやりかたを怒ってテティスはペレウスと別れ、故郷である海へ帰っていったが、その前にわが子につけた名前がアキレウスであった。ギリシャ語のa―は否定を意味し、cheilosは唇のことであるから、アキレウス（Achilleus）というよび名は、まだ一度も母親の乳首を吸ったことがないという意味になる。

竹村文祥著『神話、伝説、医学用語』より抜粋

●マイウエイ・マイライフ・マイタウン

伊豆韮山町で

十期　初又育邦

昭和四十一年八月二十六日、水道橋駅から都電に乗り伝通院前でおり、不安と期待を持って指圧学校事務所に入学手続をしたのが私の指圧人生の第一歩でした。

十期生として入学、寮に入り集団生活がはじまり、治療部に二年間お世話に相成りいろいろ勉強させていただきました事に感謝いたしております。

四十三年、卒業と同時に伊豆韮山町で開業致しました。悪戦苦闘の状態でした。自分一人の力ではとても今日ここまでやってこられませんでした。幸いにもそのつど良き人々に恵まれ御指導賜わる事が出来たことに感謝しております。

開業して十三年、自分の家が持てた喜びを踏み台に、今一生涯の土台作りを始めております。

一念を持ち、自分の治療に大いなる確信を強め努力しております。

「所を求め渡を計れ」これが治療の極意と教わりました。指圧の道は奥が深く、気をゆるめる事なく、又なれ合い的な治療にならないようつとめているしだいです。

同窓会の発展を心よりお祈り申上げます。

●マイウエイ・マイライフ・マイタウン

入学十三年目に思う

十三期　田端哲郎

十年一昔と云う言葉があるが正に指圧学校に入学を許されて以来十三年余が経過したのですが、町の環境も大きく変り遠くから眺められた学校の建物も状況が変って来たこの頃、卒業記念アルバムを開き名前と顔を一人づつ追って行くと言葉では表わすことの出来ない懐しい思いでが湧いてきます。浪越校長が桂小金治の司会するテレビのレギュラー番組で全国にあの名句の母心を流した時代は過ぎ去り、中国との国交も正式に調印されて以来中国医学の紹介が種種形でなされ、今や西洋医学的思考も去ることながら、東洋医学的思考も再認識されつつあることは、正に自然の理と申す外にありません。地球にも季節の周期がある様に、我等の生きる環境にも周期があり、経済にも、社会にもそれに対応して生きる人間の在り方にも必ず一つの廻り合せがあると思います。特に医術にも西洋的思考から東洋的思考の必要性が迫って来ている様です。これは天地の理法である陽遁から陰遁への移り目に来ている様で世の中は収斂性の働きが働きかけている様で此處十年種々の手技療法も数々と紹介されて来ましたが天人同一と云う言葉通り生の根源を今一度探究しなければならない時が来ている様です。従って人間の肉体も環境変化に伴って全機性に変化するもので、正に自然癒能力の再認識こそ生の根源を知る大きな基いであると確信します。卒業以来、同窓会を開くと集まって来るのは常に指圧一辺倒の人達で、他の学校へ進んだ人達が仲々集まって来られないので非常に淋しく、その原因を考えると、その受け皿に対する認識の差が根底にあると思います。又家庭に入った方々、協会を退会した方々も半数いるので本当に残念です。結局同窓会は人生の中の一ポイントでしかないと考えると本当に淋しいものです。指圧の卓越性は認識されつつも、日本では西洋医学的考察が根本にあるため東洋的考察が理解されないで現在に及んでいますが、これを本当に理解して貰うことがこれからの課題であると思います。昨年山内貞四郎先生が会長になられ、新しい時代に対応するための同窓会が再出発されたことは大変意義あることと思います。何卒同窓会が大きな受け皿となって狭義の指圧と云うより〝生〟の根源である天地一指という真理の探究を進めて頂き、指圧栄えて指圧師滅ぶることなき様御指導下さる様に切望して止みません。

最後に若くして黄泉の客となられた宮崎綾子、松山苣子両先生に心から御冥福をお祈りします。

●マイウエイ・マイライフ・マイタウン

母の入院看護体験記

二十一期　関口隆子

一月二十九日金曜日四時三十五分頃、母が動けなくなったと連絡があり急いで帰宅した所、重症であった。それは感冒にかかり、二日ほど寝ていたところ低血圧のうえ、食事もとらず、おまけに気管支ぜんそくにかかっていてふらふらしながらトイレからもどり、ふとんをかけて休もうとしたとき10センチ位の所から尻もちをついただけである。六時二十分頃より腰から下肢にかけてけいれんがおきた。

もしや骨に異常があったのでは？私はどうしようもなく、まず知人の紹介で京葉病院に連絡した。OKがでて、さあ車に乗せるにも寝がえりも起きあがる事もできない。こまった。布とんを担架のようにしてようやく乗せ、まず病院へ。第二レントゲン室私は不安のまま廊下をいったりきたり、まちきれず先生に、私にもレントゲンフィルムを見せて下さいとたのんだ。不審に思った先生に私の職業を話した。三枚のレントゲンフィルム、自覚症状の部位には異常がない。おかしい。東大からきてくれた整形外科の先生が首をかしげて、胸椎かもしれない、あと二枚撮るという。私はそんなにX線をあびて母は大丈夫なのか内心、心配であった。フィルムを見ると異常があった。第十二胸椎か第一腰椎かに変化が私にもわかった。完全骨折である。次の日第一腰椎の圧迫骨折という診断がくだされた。

初めての病院生活、不安と疼痛の中でただ薬物と点滴。毎日一五〇〇CCの点滴。食事がとおらない。食べると嘔吐。三日目位から顔色が悪くなる。医原病ではないだろうか？私はいてもたまらず母の痛い背部に手をあて、しらずしらずに指圧をしていた。母の顔が少し明るくなったかのように思われた。その晩血尿がでた。六時間で三十二回、異常である。熱もでた。腎臓の異常では？内科の先生の検診では腰椎骨折により腎盂炎を併発したとの事である。私は又指圧を十分位行う。痛みが和らぐというので一日何回したろう。ただ母に一日も早くなおってほしい、その事だけをねがって。五日目の朝、血尿がとまった。うれしかった。先生も薬がきいたねと母にいったそうです。でも母は、ちがう指圧のおかげだ。真心こめて圧してくれた娘のおかげだと思ったそうです。熱も下がり、寝がえりもでき、私は又背部と下肢、腹部に指圧を行った。入院して一週間、点滴を中止。感冒にかかって十日間なにも食べずに、よくがんばったと私は母の白髪のまじった頭に、「くし」を入れながら、自然に涙がでてきた。さあ、これからが勝負、栄養をつけなくては。十二日目レントゲンを写した。すると完全ではないがついている。院長先生も首をかしげていた。お年よりなのに栄養のまわりがいい人ですねと。そこで母は、実は娘は指圧師をしています。入院していらい毎日のように治療してくれましたとお話したそうです。先生はただほうーといって帰ったそうです。次の日院長先生より特診室によばれ面会し、母の事をくわしく聞きました。普通七十三才にもなると、一ヶ月以上かかるのにずいぶん早く元気になりましたね。私は返事にこまりただありがとうございましたと、じつはこちらの病院を紹介して下さったのは小松川で内科医をしている久田先生で、私に指圧師になれとすすめて下さった先生ですとお話した所、私の病院にもリハビリテーションがあるので、指圧を取り入れるとよいのですがと言っておられた。病室にもどり母の顔も大変良い。今日から一人でトイレに行く。コルセットができた。ゆっくりと、何回かコルセットをつけたが苦しいといいだし、腹まきにかえトイレに行くようになりました。食事もおいしくとれて、入院時の疼痛もなく、ゆっくりだが歩けるのがとってもうれしい。今日は全身指圧をする。軽圧でとくに下肢、腹部を中心に四十分の治療でしたが、母は満足したようです。ガスもでるし、グーッと腹も鳴ってくる―トイレへ。腹部が楽になり、腰部（腸骨陵）がうそのように楽になり、すやすや寝てしまった。母が入院して二十日目、自分は指圧を会得してほんとうに良かったと思っております。八年前江戸川区の教育センター内で指圧教室があり、父と母の為に入会、初めてお合いする副校長先生、満都子先生のお話し、指圧の実習を始めて見ると、これが自分の身につくように思い休まず出席、修了してからも中等科として残り、指導していただきました。十月の中頃、両先生に進められ学校に入学。いまは浪越指圧赤坂センターに勤務しております。毎日見る患者。私は治療師になってほんとうによかった。副校長、満都子先生に感謝しております。母も日一日と回復に向っております。私もこれからも大いに一ひとおし、一ひとおしがんばって行きたいと思います。明日に向って。

同期会便り

◆第一期会

暑さ寒さも彼岸までとか、この朝夕の酷寒も今少しで暖くなりましょう。第一期生の各先生方にはお変りもなく元気にお過しのこととお喜び申上げます。現在協会加盟の第一期生は三〇名です。その他同窓会会員は六名位です。四月の桜の時分に第一期会親睦会開催希望がご座います。開催決定の際は全員ご賛同して下さい。来賓として浪越校長と井沢先生をご招待申上げ度企画です。何かご意見がありました節はお申出下さい。

（持木、吉田記）

◆第六期会（むつみ会）

52年度八月以降
9・1　むつみ会通信発送
10・2　指圧師立法について九名集会する
11・7　同法につき62名文書発送
53年度
特別なことなく一年経過する。
54年度
4・25　高田孝氏氷眠の由、お悔みと御香料一万円送る。
なお会長、開院満十五周年行事あり。
55年度
2・11　母校40周年記念式典、会長出席
4・19　門間先生の葬儀、告別式に弔電代表参列　お供物を差しあげた。

4・20　五味氏の「骨盤調整法」発刊祝賀会あり、代表　三名参列する。

5・19・20　熱海（一泊）親睦会開催。参加者12名。名所見学し、ホテル弥生に集合。会長の諸報告後宴会に入る。翌朝再会を期し解散。

12・21　沖縄の贄氏より来信、技法に新味を加えて活躍中とのこと。

56年度

睦会廿年を記念の会、残念ながらお流れ。

1・6　蔵本、五味両氏主催、ホテルニューオータニ「堀川」に於て浪越校長、石垣副校長を迎え、廿周年を回想して懇親会開催。

1・25　新井トミ氏脳卒中で御病中とのこと、お見舞する。

3・6　会長、沖縄旅行中、贄氏の治療院訪問。活躍振りにすばらしいものあり。

6・7　同期柳澤敏男氏、開院10周年記念会に参列。記念品をおくる。

9・7　同窓会新役員の推せん方依頼をうけ、私案を提出する。

9・14・15　猿ヶ京（一泊）旅行。有志による集りで親睦と技術交換に盛大であった。

11・18　病気療養中の宮城の佐藤久次氏にお見舞差上げた。

12・13　湯ヶ原親睦会。

五味氏のご厚意による湯ヶ原の会、19名参加。会長の諸報告、謝辞、報告として、1、母校の現況　2、指圧協会の活動等あり。宴会に移り、歌、踊り等に楽しい一時であった。翌日は新しい技術等実技指導あり。再会をと解散する。（会長蔵本氏の記録中より石垣記）

◆第七期会（なずな会）

なずな会が、現在の偉容を放つ校舎（名称も日本指圧専門学校と改称）とは想像もつかない寺子屋風の教室でタタミをむしり乍ら学びの席を共にしてから早や十数年の時が流れ、ゆく川の流れは絶えずして、而ももとの水にあらず……の感懐を覚えるのは共に心することではないでしょうか。指圧の心母心、押せば命の泉湧く、を共通の基盤に、それぞれの人生体験を背に、一大転機の活路を目指して、老若男女がなんの異和感もなく一体となって響き合い、応えあって悔いなき充実に満ちた出合いの時と場が母校での二年間に持たれたように思われます。卒業後、自他を超えて、五体調和の良き環境づくりに尽くす主役、脇役となって、浪越門下生の自覚をもって、それぞれの場で活躍している現状をふまえて一昨年末には瑳ヶ沢温泉で校長の講演会を兼ね、師と共に感謝と友情の絆を深めた一泊旅行を行いました。近日中に又集い合って健在と今後に向っての確認しあう場を持ちたいと検討中です。その節は奮ってご参加下さい。（岡本記）

なづな会世話人　岡本優、広村貞雄、出川利子、杉山きよ、水岡道三、三橋昱子

◆第八期会

昭和41年春卒業以来、クラス会開催も翌昭和42年4月をかわきりに、第2回（昭和44年9月）、第3回（昭和46年4月）、第4回（昭和49年4月）、第5回（昭和51年4月）、第6回（昭和52年10月）と回を重ねて来ましたが、ここしばらく間があいていますので、今年秋頃に開催を予定しております。浪越校長他諸先生を交じえて、毎回30名程の出席者があります。クラス会開催のお知らせは後日連絡をいたします。多数のご参加をお待ちしております。なお、開催場所について、こんな所でやりたい等心当りのある方ご連絡下さい。できるだけ、安くて、うまくて、交通至便な所を望みます。昭和56年度の日本指圧専門学校同窓会総会で副会長に藤井正弘氏が就任されました。又、藤井正弘、鈴木林三両名が日本指圧専門学校で指圧実技講師として現在活躍中です。それから、次の方たちは海外で活躍中です。浦上博亘（アメリカ）、川田有一（フランス）、島田延（ブラジル）、なお、住所不詳者のうちで連絡先のわかる方がありましたらお知らせ下さい。（鈴木記）

（住所不詳者）市川忠男、今泉政光、指宿満男、池田稲太、伊東高志、浦上博亘、宇佐三生、大川清、五味久子、菅野かつ子、倉持薫、川田有一、木戸晴久、佐々木章宝、佐藤敦、杉岡貞吉、高橋ミツ子、田中雪野、長谷川典子、馬場キヨ、馬渕米子、森岡ヒロ子、森一子、平井政衛、則松淳子、米谷好子、渡辺信子（物故者）今村ナミ、金子まつゑ、青山美代子、渡辺広吉、神田キヨ、杉本サダエ、尾形儀己治、奥田良太郎

◆第十期会

昭和四十三年度、卒業の十期も早や十四ヶ年の星霜が夢の間に過ぎ、すでに還歴を超えた方も相当数に達した。然し十期は益々健在である。それは「母心」精神であり、市井にあって指圧道をとおし、社会に奉仕する心の豊かさが何時までも若さを保ち全員、元気潑剌として活躍しております。更にもう一つの原動力は、同窓会と云う組織の好在であり十期は、十期会（会長　高橋宏次）、研指会（会長　幸村善雄先生）文字どおりの二本建ての組織があるが、人的には表裏一体であり毎年、恒例である二回の集会は、常に三～四十名が出席し盛況裏に開催して参りました。目的は勿論、同期の親睦、実技研究、情報交換であります。指圧師共通の博愛心と友情は、多年に亘り苦労研鑽した秘技を各自は惜気なく公開し合い、指圧道の発展と向上に切磋琢磨しつつ会は今日に至り、更に将来に継続されて行く。このように堅い同窓生の絆の要は、良識ある人望の厚い幸村善雄先生と、抱擁力があり誰からも愛され慕われる小西芳先生の存在であり、平素の御苦労盡力の賜である。またこれを支持する会員全員に対しても心より感謝をしている次第です。十期会を対象に述べたため我田引水のきらいがありますが、この「人間愛の絆」と云う美徳は、日本指圧専門学校同窓会の伝統であり、実質的にはこの美徳を十期会が体質的に伝承を受けているにすぎないと思います。終りに、高齢であり、元教育行政にあって永年の校長歴を持つ同期の山内貞四郎先生が、現在益々元気で母校の教壇に立ち、更に同窓会の会長であることは尊敬と誇りの念を禁じ得ません。（高橋記）

◆第十一期会

六九鳥（ムク）会とは変な名前とお思いでしょうが、先づその命名の理由をあげますと、我々十一期生は全国にちらばってゆくので全国どこにでも生息活動しているのがむく鳥で一九六九年のとり年に卒業したということで決定致しました。卒業以来十三年、入校当時ある者は子連れの貧しい未亡人でお先真暗だったのが、今では子供は立派に成長しわが家も新築、又ある者は海外旅行にも行ける自分になり、指圧は定年もないので老年になっても気楽に働けると頑張って

いる者も多数居ります。これもみな指圧学校、特に浪越先生のおかげと感謝しております。報恩感謝を忘れては人間ではない。六九鳥会の会員はこの一念をもって、一致団結指圧学校の思に報いる覚悟でございます。

この度、学校も専門学校になって益々隆盛なことは喜こばしい事でございます。

六九鳥会の皆様、本年の総会は九月頃に予定しておりますので、ぜひ大勢の御参加お待ちしております。

（岡田記）

◆第十四期会

新らしい酒は新らしい皮袋に、という言葉があります。同窓会は今年度から新役員によって、大きな期待を荷って発足した事は已にご承知の通りであります。そして早速に新会員名簿の作成及び会報の発行と大変な事だったと思いますが、共に所期の目的を達せられた事は会員の一人として誠に大いなる喜びであり、感謝であります。

私達はこの良き機会に、いよいよ交りを重ねて相共に切磋し琢磨して、指圧師としての資質の向上を計りつつ、母校の名声をますます高揚して参りたいものであります。

次に紙上を借りて、十四期の皆さんに一言お願いを申し上げます。私達は卒業満十年を迎える事が出来ました。この好機に旧交を一新して再出発を計りたいと思います。

就いては合同総会を盛大(?)に開催したいと思いますが、一に諸兄姉のお力添による外ありませんので特段のご協力をお願い申し上げます。

（伊原記）

◆第十五期会

志を同じくして日本指圧学校に入学して、昨年で十周年。苦楽を共にし、めでたく卒業して明年で十周年になります。

十五会(イコーカイ)と名づけて、十年を振りかえってみました。

第一回同期会　四十九年五月二十六日
（於岡埜荘）
五十年三月二日　因泥氏ハワイ進出の壮行会(於指圧学校)
第二回同期会　五十年七月二十五日
（於指圧学校）
第三回同期会　五十二年五月十四～十六日(佐渡観光旅行)
第四回同期会　五十三年五月二十八日
（於うかい鳥山）
五十六年四月四日～六日　入学十周年記念宮崎旅行

この十年間めでたく結婚した仲間もおります。また惜しくも逝去なさった仲間もおります。減ることはあっても、決して増えることのない同期生。いつまでも大切にしたい仲間達。

一人一人の思想は違っても、同じ巣から飛び立った私達。巣のぬくもりを忘れてはならない。

（相澤記）

◆第十七期会

第一回、十七期会は昭和五十二年二月、校長、副校長、担任の先生方をお招きして、大塚、寿司常会館にて卒業二年後の旧交を親しく温めあった。参加者卒業時の三人中一人が出席する六三名の盛会であった。

第二回、十七期会は昭和五十四年四月、箱根一泊二日旅行、初夏を想わせる好天に恵まれ、大型デラックス観光バスで新緑映える天下の景勝地箱根路へ、箱根思賜公園、関所跡、箱根神社、芦ノ湖で学生時代を懐しみながら一日楽しく過ごした。

箱根小湧園での夕宴は、校長、副校長先生初め、電車や、自家用車で追いついた仲間を加え、久し振りのA、B、Cクラス対抗隠し芸大会に親睦の花が大きく咲いた。

就寝前、露天風呂では煙る湯の香と、爽やかに頬を撫でる山の冷気、手を伸ばせば届きそうな満天の星空が頭上に輝いていた。

参加者四十六名

第三回は今秋に予定していますから、日時、場所(都内)等決定しましたらご通知致します。その節はご協力をお願いします。

（小林記）

◆第二十一期(惟指会)

惟指会（21期A組）では一月八日午後四時からレストラン・ダイシン（大森）に石垣先生を招いて新年会を開催し安倍、大久保、大野、筑島、嘉藤、片岡、小林(駒)、近藤、佐武、佐藤(好)、鈴木(義)、谷浦、鶴岡、難波、奈良、沼倉、都沢、宮崎の十八名がなつかしい顔をみせた。

片岡会長挨拶のあと、石垣先生より専門校となった母校の近況などの話があり、鯉のから揚げまでついた三千円会費にしては豪華な?料理に腹をふくらませ、アルコールの心地よい酔いにひたり、難病を治して感謝されたとか、誰れとだれかさんはやはり結ばれたなど、仕事やプライベートの話に時の経つのも忘れて歓談を交わし、楽しい一夕を過ごし、午後六時半に次回を約し、三々五々友を誘っては二次会の席をもとめて散会した。

（片岡記）

◆第二十二期会

昭和五十七年二月七日文京区後楽二―六のヂョングにて卒業後初の二十二期C組の同級会を開催しました。浪越日本指圧専門学校長佐々先生佐藤八郎先生稲場先生小林秋朝先生の御出席を迎ぎ同級生二十一名諸先生の得意ののどをきかせていただきたのしい会合でした。二年たった今皆さんの自信に満ちた顔をうかがいたのもしく感じました。（湯沢記）

昭和五十七年度日本指圧専門学校同窓会通常総会のご案内

左記により同窓会総会を開催いたしますので、ご出席下さいますようご案内いたします。

昭和五十七年三月
日本指圧専門学校同窓会会長
山内貞四郎

記

一、とき　昭和五十七年五月八日(土)
受付〇・三〇
開会一・〇〇～四・〇〇
一、ところ　文京区民センター
（春日町交叉点）
一、内容　1講演会
ヨーロッパ実情と第二回
国際指圧大会(浪越徹先生)
2総会
3懇親会（会費二五〇〇円）

追伸　なお、五十六年度の新しい名簿が出来ましたのでご出席の方にお渡し(無料)いたします。

投稿歓迎

①「マイウェイ・マイライフ・マイタウン」近況、体験、我が故郷だより等。自由。四百字詰原稿用紙二枚半、千字以内。②「同期会便り」四百字以内。③「同好会」三百字以内。④「投句」三句以内。◎宛先――会報編集委員宛。◎原稿には住所、氏名、電話番号を明記。◎投稿原稿は返却しません。

（お問い合わせはハガキでお願いします。）

〆切は11月末日です。

俳句

二十四期　玉木茂雄

人がいて　指塚明るき　花の朝

力餅　秋日と共に　のみこめり

親指に　たくす人生　残り柿

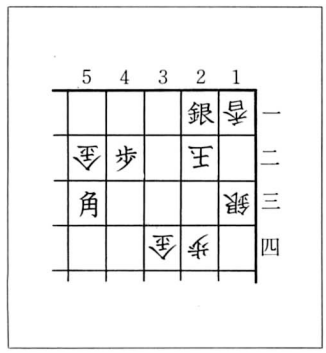
詰将棋

出題者　七段　下平幸男

持駒　飛　角

〔ヒント〕持駒の角は効果的に使うこと。

（10分で2級）



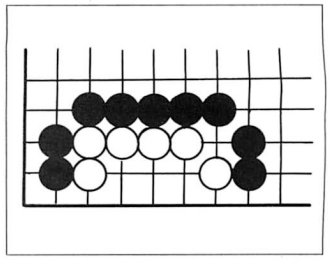
詰碁

出題者　七段　桑原宗久

白先

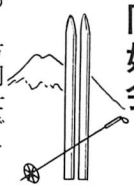
〔ヒント〕左右同形？

（5分で八～九級）



同好会だより

●スキー・テニス同好会



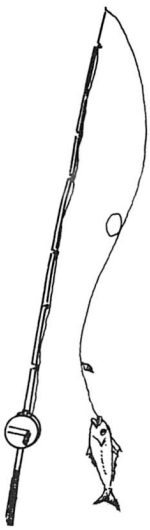
春から秋まで休日都合のつく方同士でテニス、冬期は白銀の世界、スキーで日頃の運動不足を補いたいと思ってます。ベテランが無料で手とり足とりコーチしてくれるそうです。初心者歓迎、経験者も是非参加して下さい。

連絡先　幹事　鈴木信彦（二十二期）

電〇四五―九〇二―二六三三

日本指圧専門学校内　木下　誠

●釣天狗会のお知らせ



私はつりがすきで良く出かけます。つりでも海づりで特に沖づりです。四十人前後の船です。海は大きいので豪快でダイナミックでストレスの解消と健康の維持にはもってこいです。大きな船にはトイレもついてますので安心ですよ。男性女性に限らず連絡お待ちしてます。

連絡先　幹事　湯沢洋二（二十二期）

電（三二六）三八八四

日本指圧専門学校内　藤井正弘

●ゴルフ同好会

二年前に発足しました。仲間の腕前は殆ど初心者並ですが、春、夏二回、徳治郎杯争奪戦コンペを楽しみに集まってきます。男性一六名女性会員は現在五名です。次回は八月、緑と太陽の下で一緒に汗を流しませんか。参加をお待ちします。

連絡先　日本指圧専門学校内　芦原　滋

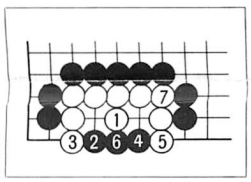
詰将棋解答

〔正解〕2三飛、3一玉、4一歩成、同玉、3二銀成、同玉、4一角、同玉、2一飛成まで。九手詰。

〔解説〕詰将棋らしい着手の2三飛。これを同玉なら4一角で詰みます。3一玉のとき、ジャマな歩をそして銀を捨てれば絶好の角打ちが生じます。

詰碁解答　白先　イキ

左右同形格言どおり、白1が急所です。黒2なら白3と外からオサエます。黒4ならやはり外から白5とオサエ、黒6のとき白7でイキます。



編集後記

創刊号をお届けします。この会報が目ざす母校と同窓生のパイプ役の機能を果しながら、同窓生との間に結ばれる糸が、より強い絆に成長することを願わずにはいられません。また刊行準備時以来多くのご好意と、ご助言を戴いた方々には、編集委員一同、心からのお礼を申し上げる次第です。■さて本号では「視点」、「窓」で共通の事業と問題点。話題と認識。「海外通信」「マイウェイ・マイライフ・マイタウン」「医学四方山話」「YOKOGAO」「同期会便り」はシリーズで紹介していく予定です。■母校の学生生活の一端を特集した、最新の医学知識、臨床の場を与えられ、三月十四日、二十四期生の精鋭達が爽やかに巣立っていった。希望わく、心たのしい日であった。迎えよう温かく。■今回投稿を戴いたなかで事情により、掲載できなかった方には紙面をお借りしまして、お詫びと、お礼申し上げます。今後共、みなさまからのご教授、ご示唆を賜わり、内容充実発展のため、ご協力と、ご指導の程お願い致します。■伝通院の桜の蕾が綻びる時、浪越両先生、同窓三十五名ヨーロッパで見事に指圧の花を咲かせていることだろう――。■母校新校舎落成記念日と、この創刊号のフィニッシュと重なった。感無量――。

（K生）